

建築におけるマルクス主義のアポリア

—dezam 結成から戦後の零地点までの西山卯三とその史的評価の布置—

The Aporia of Marxism in Architecture

—From DEZAM's Establishment to Post-War Zero Point: Uzo Nishiyama and the Arrangement of His Historical Evaluation—

keyword : Uzo Nishiyama, Marxism, Modern architectural history

西山卯三, マルクス主義, 近代建築史

序章

0-1 背景

西山卯三 (1911-1994) は建築における二〇世紀を象徴する人物のひとりである。一九三〇年京都帝国大学工学部建築学科に入学し、建築学生団体「dezam」を結成。マルクス主義を受容し、後の理論的土台を形成する。二度の世界大戦と戦後復興、高度経済成長という動乱のなか、つねに「すまい」という命題に向き合いつづけ、住宅計画・住宅供給に関する理論の礎を築いた。その活動は研究者にとどまらず建築界の中心的論客として、あるいは建築家、運動家として、生涯にわたり多彩な足跡を残している。

本研究は西山のマルクス主義者としての側面にスポットを当てる。日本近代建築史はいまなお一般に丹下健三を代表とするモダニストの勝利の記録として語られる傾向にあるが、戦前から戦後にかけての建築界は、文芸や芸術と同様、モダニズムとその他方に存在したリアリズムないしマルクス主義との衝突を内側に抱えこんでいたはずだ。左派の建築運動についてはこれまでに見取り図が示されている¹⁾ものの、その個別の思想や成果に関する研究は醸成されていない。昭和初期の西山の思想の軌跡を論じることは、日本近代建築史における左派のパースペクティブの一つを提示するという意義をもつ。

西山に関する先行研究は下記のように把握できるだろう。

[1] 西山の回顧録

西山は自らの生涯を研究対象として六冊の自伝²⁾を記し、また著作集³⁾および『国民住居論攷』⁴⁾ (1944) 各章に解題を添えている。解題には同書所収の論考の要約にくわえ、発表当時の事情や背景がまとめられている。これらは当時の状況を臨場感をもって語り、西山の思考の機微を記した貴重な資料である。しかし極めて主観的なものであることに注意する必要がある。

[2] 西山の門下生を中心とした資料整理

西山の没後、「西山卯三記念すまい・まちづくり文庫」(以下、西山文庫)が設立された。西山に関わる「書籍・報告書・雑誌(約8500点)、手書き原稿・メモ・調査研究資料(約650ボックス)、著作原画(約70冊のクリアホルダー)、スケッチブック(約120冊)、写真ネガフィルム・スライド(約10万コマ)、日記・日誌・日録・旅行ノート・講義ノート・学習ノート(約400点)、手紙・はがき・名刺(約45ボックス)」⁴⁾を整理・保管し、一般に公開する活動がなされている⁵⁾。これらによって豊富な資料を用いて西山並びに当時の建築界を研究することが可能である。

[3] 西山に関する業績別の評価

[2]の作業がひとまずの完了をむかえると、『西山卯三の住宅・都市論——その現代的検証』⁶⁾ (2007) が発表された。住宅論、

農家研究、構想計画、大阪万博の基本計画、地域計画論・景観論というテーマで諸論考が編纂されている。

[4] 思想史としての西山の史的評価

西山のマルクス主義者としての側面に触れながら、その思想を評価する試みには、布野修司による「西山卯三論序説」⁷⁾ (1984-85、以下「序説」)、広原盛明による『評伝・西山卯三』⁸⁾ (2023、以下『評伝』)、上述『西山卯三の住宅・都市論』所収の住田昌二による「総論 西山住宅学論考」⁹⁾ (2007、以下「総論」)がある。『評伝』は直接「序説」に反論を加えるのだが、相互にねじれた様相をみせており、いささか見通しの悪い状況である。以上のように、近年西山を研究するための土台が整いつつあるが、現状においてとくに西山のマルクス主義者としての側面が十分掘り下げられていないといえよう。

0-2 研究の目的と方法

本研究は、以下の三点を目的にする。

- (1) 布野の評価と広原の反論によって形成された議論の地平について、その構造を明らかにすること。この作業を通じて、西山評価を覆うヴェールを剥ぎとることがねらいである。
- (2) (1)と同時に達成されるべき目的として、西山のマルクス主義者としての立場を明確にすること。あらかじめ予告すると、西山は布野・広原が理想化するような革命運動への実践に直結したマルクス主義者ではなく、あくまで国家社会主義者であって、その立場はdezamから変わらなかったと示すことになるだろう。
- (3) 西山の住宅・都市・国土の構想についてdezamから戦後にかけての展開を跡づけること。(2)で説明した国家社会主義者としての西山像と矛盾なく理解される特質をもつと示されるだろう。

0-3 研究の構成

本研究は、西山への既存の史的評価を足がかりとしつつ、それらに批判的検討をくわえ相対化する作業を通して、西山の思想の軌跡を描きなおよす第1章から第3章によって構成される。

第1章では、布野の「序説」の提起が、「転向」という概念を用いるがゆえに偽の議論であることを論証する。それに伴い、西山のマルクス主義との接触からその後の展開を跡づける。

第2章では、「序説」とそれに反論する広原の『評伝』がともに「転向」という仮構された平面で西山を理想化していることを示し、西山があくまで国家社会主義的な建築家像を目指したことを提示する。

第3章では、終戦後における西山の国土計画が、dezamで描いた住宅・都市像の地平にあることを示す。

なお本論文において旧字体の表現は断りなく現代表記に改める。

第1章 序説：国家社会主義という前提の源

1-1 「序説」の位置づけ

「序説」は一九八四年一月から八五年一月にかけて雑誌『群居』に掲載された論考であり、八一年に刊行された『戦後建築論ノート』¹⁰⁾ (以下『ノート』)と問題意識を共有している。また『ノート』は、「戦前・戦後を通じての一なる『建築における昭和』を対象化」¹¹⁾する七〇年代の「同時代建築研究会」の試みの延長だ。布野はこれら一連の活動のなかで、日本の近代建築の抱える諸問題が戦前から上滑りしつづけていることを鮮明化し、ゆえに建築の新たなパラダイムを示すことを喫緊の課題とした。その過程で要請されたものこそ日本近代建築の批判的検討と、それに伴う日本近代建築史の描きなおしである。「序説」はその作業の一端を担い、「昭和」の一人の建築家として西山がいかにか戦前の問題をそのまま戦後へと持ち越したのか、あるいは解消したのかを位置づけようとするものだ。

「昭和」によって戦前-戦後を地続きにとらえようとするとき、不可避的に戦争と建築という主題がもちあがる。そこで七二年に宮内康が用いた概念が「転向」である¹²⁾。戦時下では政府からの弾圧のために社会主義者などがその思想を放棄することを指したが、宮内のいう「転向」は「権力によって強制されたためにおこる思想の変化」¹³⁾をいう。これは思想史の分野における鶴見俊輔や藤田通敏らの『転向研究』(1959)を援用するもので、公然ときっぱりとした革命派「からの転向」に対して、戦時下における建築家の動向を総力戦体制「への転向」とみなす。『ノート』および「序説」もこの概念を採用し、「建築家における転向の諸形態」¹⁴⁾の見取り図を引こうとした。西山の思想の軌跡もまたこの平面のうえで捉えられているのである。

1-2 二つの転向と二つの問題

「序説」は西山について二つの転向を指摘している。一つは、戦時下に発行した『住宅問題』¹⁵⁾ (1942) から、『国民住居論攷』(1944、以下『論攷』)への転向であり、もう一つは、西山が三七年度までに記した論考(以下「初期論考」)から『論攷』への転向である。

この二つの転向を示すことで、「序説」は『論攷』について以下の事柄を主張する。「国民大衆の住宅のあり方へのアプローチがそこで問われるのであるが、唯物史観、マルクス主義を出発点としながら国家的性格が強調されるのである。見事な逆転があるといっている。国民へとというベクトルが逆転して国家へと向けられるファシズムそのもののもつ構造を西山においてもみることができるのである」¹⁶⁾。つまり「序説」がまず問題とするのは、戦時下における西山理論が、国民へと直接アプローチする構えから、強力な国家の存在を前提としてのみ成立するものへと変化したことである。

これと並行して二つ目の提起がなされている。あらかじめ『ノート』で指摘されているのは、戦後やがて公的な住宅供給の主導権が公共サイドに移っていくと、建築家は住宅へのアプローチを「個別の住宅の設計のレベルに限定」し、民間において建設される住宅を放置してしまつたことだ。西山は戦時体制、戦後改革、高度経済成長と社会体制が変化してもなお国家を主体として住宅へアプローチしたが、それは結果的に「建築家がコミットする回路を大衆的に生み出し得なかった」と批判的に論じられている。すなわちここで問題とされるのは、西山の論理が戦後において国家的枠組みを保持したことである。

これら二つの問題に三つ目の問題が重ねられている。まず戦時下における西山理論については、西山の住宅理論の土台となつた三十年代後半の住宅調査に国家政策の性格があつたと述べ、ゆえに「あらかじ

め国家社会主義的枠組みを前提とし、ファシズム国家の論理へと収斂していった」¹⁶⁾と指摘している。次に、戦後における西山理論については、国家的枠組みという立論の前提を不問のまま、その方法論のみを導入したと指摘する。つまり戦前-戦後において、西山は自身の理論の国家的枠組みに終始無自覚であつたことが論じられている。

以上より、「序説」は西山理論が国家的枠組みを前提としたこと自体を問題としているのではなく、その無自覚さを問うているとわかる。畢竟「序説」の提起は以下の二つにまとめることができる。第一に西山が戦時下において国家社会主義へと無自覚に変化したこと、第二に西山が戦後において国家社会主義を無自覚に保持したことである。

1-3 『住宅問題』と『国民住居論攷』

戦時下において西山の思想的態度は果たして変化したのか。まずは『住宅問題』から『論攷』への転向について検討する。『住宅問題』は、量的住宅難、質的住宅難という二側面から捉えられていた住宅問題を、資本主義社会の経済メカニズムそのものから発生するとして明示しなおし、その解決の方向を示そうとした。自由経済は必然的に住宅難を生み、資本主義社会はそれに直面してはじめて対処療法的に解決を模索する。しかし、計画経済の社会は「自由経済の自然的暴威を未然に防ぎ、産業文化の止まる所のない上向の発展を導く」¹⁷⁾という。そして計画経済を根本的前提として定立したとき、「我々のすむ楽土を、個々の住居と公共施設とを分つ事なく一貫した総合的住居施設として、全国土の上に計画的に建設する」¹⁸⁾ことが可能となると唱える。

一方、『論攷』は住宅に関する理論を包括的に提示する。国家的住宅政策を通じて建築生産システムを統括する新しい建築家像の提起(第一編 住居建築家)。住居の質に関する社会科学的な考察の提起(第二編 住居の質)。住宅の基準についての科学的考察と方法論の提示(第三編 住宅基準)。都市における集約的住居形式適用の主張(第四編 住居形式)。住宅営団を中心に据えた、企画・設計・監督・作業といった建築生産体制の統合と規格化に伴う基準寸法に関する考察(第五編 住宅産業)。国家管理の下での住居施設の再配置(供給と既存施設の活用)に関する具体的な住宅政策理論の展開(第六編 住宅政策)。つまり『論攷』は住宅を総合的に捉えた解決体系の構築そのものを主題としたといえるだろう。

二冊の構えはたしかに異なり、この点に「序説」は「転向」を見出している。しかし、書籍の形式に着目すれば、『住宅問題』が書き下ろしであるのに対し、『論攷』は三六年以降の論文を編纂したもので、内容の大部分は『住宅問題』と同時期あるいはそれ以前に用意されている。くわえて両書籍が国家主導の住宅へのアプローチを前提としていることは明らかだ。つまり『住宅問題』と『論攷』は、「転向」というベクトルではなく、国家社会主義的枠組みを共有したひとつの住宅論だといえよう。

1-4 「初期論考」から『国民住居論攷』

つぎに「初期論考」から『論攷』への転向について検証する。「序説」は「初期論考」の「決して明言はされないのであるが、西欧の近代建築運動について、個々の差異は認めながらおしなべてプチ・ブルの運動として切つて捨てるどころから、そしてロシア革命以降のロシアの動向へ熱い期待を寄せるところから」¹⁹⁾、プロレタリアートの解放運動へと突き抜ける構えを見出している。加えて「初期論考」は語調が概して苛烈だ。様式建築家に対しては、パンを得るために骨董学的芸術に奉仕しているとしてその墮落を「我は叫ばねばならない。黙

殺を捨てて暴露し、撲滅しなければならない²⁰⁾と激しく主張し、そのようなアジェンションの性格が「初期論考」全体に通底している。

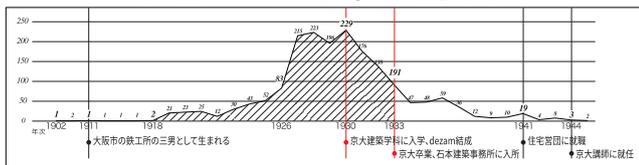
しかし、階級闘争如何の問題には直接踏み込んでいないことを指摘せねばならない。たとえばトロックン・モンタージュ・パウ(乾式組み立て構造)の技術的可能性に言及しながらも、その実現は資本主義制度もとでは困難であり「国家の様な統一計画力に待たねばならない²¹⁾と述べるにとどまるとき、「初期論考」は国家社会主義というフレームをイメージするが、社会主義体制をいかに実現するのかという問題を留保していることがわかる。

1-5 マルクス主義との接触から「初期論考」

ここで「初期論考」までの西山の軌跡に目を向ける。西山は一年に大阪市の鉄工所の三男として生まれた。恵まれた学習環境のもと旧制第三高等学校に入学。いわゆるインテリ層だったが、当時大正デモクラシーを経て知識人階級を中心にマルクス主義が急速に浸透していたなか、西山は鉄工職人の家庭で人文的教養に触れることもなく、三高時代も部活動にうちこみ、「社会オンチ²²⁾」の青年であった。

三〇年、京大建築学科の入学生全員で学生団体「dezam」が結成。彼らはその後卒業に至るまで、会誌の発行を軸に共同研究・制作を発表しつづけた。そうした活動のなか、雑誌『dezam4』上で同級生伏原五郎が論考「建築についての走り書考察²³⁾」(以下「考察」)を発表する。この論考こそ自身のマルクス主義への接近を契機づけたと西山は回顧している²⁴⁾。日本におけるマルクスの受容過程について出版の観点から研究した久保らの成果と、そのリスト「マルクス主義関連文献²⁵⁾」を西山の経歴に対応させると、西山はマルクス主義文献刊行の一大ブームから言論統制が強化される狭間においてマルクス主義と接触し活動を開始したことがわかる。この時期になると入門的な書物が翻訳書を含めて一定数出版されている。事実、西山自身の述懐によれば、西山は「遂に[資本論]にはとりつけなかったが、『教程』とか『概論』といわれる解説書²⁶⁾」を読むことで唯物史観を学んだ。

表 1 マルクス主義関連文献の出版点数と西山の経歴
(久保誠二郎「マルクス主義関連文献」を参照して筆者が作成)



したがって、まずは「考察」が直接の教科書となったであろう。実際伏原の「考察」は、西山の唯物史観の集大成である「『建築家』のための建築小史²⁷⁾」(以下「小史」)においては論の構造や文章がたびたび参照・引用され、自伝においては抄録が掲載されている。西山のいう様式の暴露も、伏原の「考察」が、「住宅建築問題における資本主義社会の矛盾の暴露実施、これが現在吾々に与えられた課題ではなかろうか」と述べることと同型の議論だ。また、西山は当時ロシア語を独学しながらソ連の雑誌を読み込んでいたという²⁸⁾が、そのソ連への憧憬も、「考察」が「ソヴィエトロシアの建築は今正しい建築の一步一步を確実に歩んで」いるとして、「生活の共同化を根本原理とした新しい社会主義都市住宅」に期待の視線を向けることと同一である。「初期論考」の構えは「考察」に集約してみとれる。

以上より、西山はマルクス主義を原典ではなく解説書や教科書、とくに伏原の「考察」によって形成したと指摘できる。「考察」と「初期論考」は資本主義下のあらゆる建築を否定し、ソ連を模範とした。

つまるところ西山にとってマルクス主義はそもそも国家社会主義下の建築として受け入れられた傾向が強い。西山理論は「転向」の結果、国家社会主義へと変化したのではなく、起点から変わらず国家社会主義を保持している。「転向」は端的に偽の議論である。

第2章 評伝：国家への自覚の所在

2-1 「序説」と『評伝』

西山の門下生である広原が著した『評伝』は、西山の生涯を評伝としてまとめた大著である。戦前戦中期の西山の動向を書いた第一部で「序説」の提起する第一の問題に反論を加えている。『評伝』は、「序説」について「戦時下のファシズム体制の下で、当時の学者や知識人たちがどのようにして戦ったのかという歴史的洞察力が欠如²⁹⁾していると批判する。なぜならば広原は戦時下の西山の態度を偽装転向とみなすからだ。偽装転向とは、転向を装って体制への抵抗の姿勢を維持することを指す³⁰⁾。すべての抵抗戦力が当局により解体された戦時下では、いかにして体制への抵抗の姿勢を維持するかが問題であり、体制に潜伏することなしに「批判の最も有力な形態³¹⁾」たりえない。ゆえに西山が国家を理論の前提としたことは「マルクス主義理論を実践するため、敢えて『火中の栗を拾う』³²⁾」ものだと広原は主張する。

あらかじめ鶴見によって指摘されているのだが、「転向」概念は仮説に依存して「同じ一つの資料が、逃避としても解釈されるし、長期抵抗の用意としても解釈される³³⁾」という問題を孕む。実際、戦時下の西山について、布野は国家社会主義へと無自覚に変化したと論じ、広原は偽装転向という概念によって見かけのみ変化したと別解釈を提示したのだから、この構図は鶴見の指摘に当てはまる。そもそも二者の議論は「転向」という仮構された平面でなされており、実践的なマルクス主義者・西山如三という理想を共有しているといえる。つまり広原の反論のみでは、西山理解を宙吊りにする効果しか持ちえない。私たちには布野・広原をとともに批判できるもうひとつの地平が必要であり、第1章の結論がそれを与えるだろう。

2-2 自覚の所在

戦時下において西山は国家社会主義をいかに自覚していたか。『評伝』は、西山が著作集の解題で、戦時下の論考についてそれが「当時ゆるされていると考えた最大限の抵抗³⁴⁾」だったと述べることを指摘する。その例証として挙げられるのは、『論攷』所収の「住宅計画学の方法論³⁵⁾」(以下「方法論」)に付記された解題だ。そもそも「方法論」は西山の住宅計画論の枢要であり、次のように立論される。

まず、庶民住宅の歴史的発展経過と現状の把握からその「基礎条件」を探り、そのうえで生活様式を規定する「前提条件」を定める。そして具体的設計の指針として「計画基準」を打ち立て、庶民を若干の居住者集団に分類し、いくつか段階的な「型」を想定。計画基準にしたがって「標準案(解決型)」をつくる。標準案とその基準は繰り返し相互に検討を重ね絶えず改善していくものであり、これらを土台として現実の具体的設計に即した「規格設計」をつくる。——このように、不特定多数の庶民を対象に住宅供給の方法論の確立が試みられた。

さて、戦時下にかかれた「方法論」の解題³⁶⁾は、第一に「国民住居水準の現況および国民住宅経済の現機構をもつては技術的に適正と考えられる状態を実現することが困難であること」、第二に、居住者の家族構成と経済的能力という座標軸で型種は編成する必要があるが、「かかる複雑な型種の編成は現実には不可能」としてしている。そして「この二つの立論上の困難は蓋し国民住居標準の探究とい

う超現実的、国家的立場に計画者をおくことによつて生ずる困難であり、『国民住居』が論じられつつあるのにも関わらず現実の歴史は未だこれを実現する時代に達していないという事実による。しかし著者は国民住居の計画法を描き出すためには、かかる理想的立場に立たざるを得なかった」と述べる。ここに『評伝』は、西山があえて理想論を唱えることで反語的に体勢を批判したと主張するのだが、一度立ち止まり、ひとまず理論の限界としてではあるが、西山が国家という枠組みを自覚していたとみなしてみる。

2-3 住宅営団へ

「方法論」の初出は四一年十月、西山が住宅営団に所属していた時期である。ここで住宅営団設立の二年前に書かれた「住宅政策への一展望——建築行政の新展開と建築家の任務」³⁷⁾(1939、以下「一展望」)に注目する。この論考では軍需工業労働者の住宅不足により脚光を浴びはじめた住宅問題に対し、量的不足の解決のみならず住居水準の質的向上が必要だとして、「国家・土地所有者・および労働者を雇用する企業の三者」がその責任を負うべきだと語る。その推進のため提起するのが強力な指導機関＝建築行政の運用だ。その新機構は具体的に、A)全国住宅建設会社、B)建設技術工組合と技術工養成機関、C)地域別住宅経営会社、D)住宅組合として示されている。営団発足前の先駆的な提言だといえよう。そして「個々の建築施主の助言者、設計者としての関心ではなくして、『国家の建築家』として新しい建築行政を通じて、すなわち建設の標準化的研究と統制的指導およびそれを可能にするべき新建築行政機構の創出」こそが建築家の役割だと西山は述べる。

このときの西山はすでに唯物史観に基づき、資本主義下における建築家の試みを総批判していた(第三章二節)。西山にとって、造形的に美しい建築をつくり出す理論は「お伽話か、ヒトリヨガリか、こけおどしか、ないしは宗教的信仰」³⁸⁾にすぎないと切り捨てられている。ここに、行政機関としての「国家の建築家」が対置されたのである。営団発足以前に提起していた建築行政の展開を、西山が営団に期待したことは想像に難くない。

営団のなかで西山は、機械的に踏襲されていた業者請負施工の建設形態を「質的に再編成し、建設と経営を一貫した組織的事業の遂行体を実現するところに集中の意義」³⁹⁾があると唱えつづけた。さらに四三年になると「余裕ある住宅に住む家族が、自己の住生活を行う住居面を縮小し、これによって生じた余裕住居面を新しい居住者に提供する」⁴⁰⁾割り込み居住を軸とした既存住宅の再配分・再利用を考えている。一住宅に居住可能な人数の基準や、割り込み時の平面計画の試案などを具体的に提示することから西山の衷心が伺える。そこでは「生活の徹底的共同化の実現」⁴¹⁾と、住宅の国家監理の強化が目指されており、ここに社会主義的理想(第三章三節)が戦時体制に重ねられていることも指摘できる。四三年末には建物疎開について、営団が取り壊しを引き受け、そこで得た資材を新建設に結びつけるべきとして、営団の建設機構の強化を主張する。これをきっかけに西山は直営建設部隊の創設を軸とする営団の改革運動を主導するが、それが上層部に受け入れられることはなく、結局西山は四四年三月に営団を退職する。

西山は戦時体制への抵抗の姿勢をもって国家的枠組みに潜入したわけではないだろう。むしろ建築の生産体系を計画指導するための国家的枠組みを営団以前から必要と考えていたのである。

第3章 総論：「マルクス主義」の建築家

3-1 「生活基地」と「工業都市」

住田の「総論」は、西山を「マルクス主義者以上に計画主義者、言い換えればシステム論者」⁴²⁾とみなしている。なぜなら住田は、西山の構築したマスハウジング・システムが戦前から戦後復興期にかけては有効であったと認めながら、六〇年代以降に行き詰まりをみせたことを問題意識として、そのシステム自体に視線を向けている。ゆえに「総論」は西山の政治性を捨象する。以下でも西山の描いた社会像に焦点を当てるが、ここではむしろその形成過程に注目したい。西山が学生時代に提示した「日本工業都市に建つ共同住宅」(以下「工業都市」)と、終戦後すぐの「生活基地」の構想を比較する。

「工業都市」は、三一年にdezamが共同制作した総人口四万人の労働者のための住宅都市計画である。「やがて近い将来、より望ましい社会が生まれてくる」と仮定し、「国が予算を用意し、土地を提供し、労働者の組織する住宅組合の要求にもとづいて建設される」ことを計画の前提とした⁴³⁾。大阪近辺の南北二km、東西六・二kmの矩形敷地に、「西の方にスポーツ場、老人住居などのある慰安区域があり、中央区域は家族住居と独身者住居と結びつけた縦割りの十ブロックで形成され、その中央部を横に貫いて文化・緑地ゾーンがあり、その中に学校、劇場、映画館、中央図書館などが配置」⁴⁴⁾されている。

一方「生活基地」は、西山が終戦直後、雑誌『新建築』復刊第一号と第三・四合併号を独占し発表したものだ。西山は住生活と勤労生活の統合として「生活」を捉え、その総体を包括する空間概念を「生活基地」と定義した。「自由主義経済社会ではなくて、これを止揚した社会主義計画経済の社会が樹立される」⁴⁵⁾ことを前提とし、住居・住区・都市・国土までを段階的に積み上げる社会像を構想した。戦時下で用意された住宅理論の総決算といえるだろう。

3-2 根拠：唯物史観による庶民住宅の主題化

「工業都市」の理論的根拠はひとまず伏原の唯物史観からきたものだといってよい。それ以降、西山は唯物史観をいかに深化させたのか。西山は武田五一や天沼俊一の講義が自身を建築に開眼させたと同感しているが、やがて「新興建築」を受容するなかで、様式建築とそれを肯定する武田ら様式建築家たちへの反感を抱きはじめてきた。様式は「建築家の金儲けの手段」⁴⁶⁾であると痛烈に批判している。

この素朴な反発、様式建築批判は、唯物史観への接近とそれによる建築史の描き直しという作業のなかで理論的強度を獲得する。卒業論文の序文をもとにして書かれた「小史」はその集大成だ。西山は唯物史観をなぞり、建築の発展過程を、原始共産社会・奴隷社会・封建社会・資本主義社会という直線的な西欧中心的進化論、かつ各時代において主題となった支配者階級の建築とその他の被支配者階級の建築という二元論のもとに記述している。したがって「様式」を「その時代の生産力の発展を通じて得られる余剰労働力を己がために消費する支配階級の建築・モニュメント」と定義している。

この歴史観のうえに資本主義社会での建築家の批判がなされる。産業革命以降、本来的に造型藝術家としての性格をもつ建築家はブルジョワジーの要求に対して「様式的・形式的ヴァリエーションの探究」をはじめたという。やがてさらに工業化が進むと、「大資本の利潤追求のための功利主義の原則」に基づき、グロピウスやル・コルビュジェらによる金融資本主義社会の建築様式が確立され、あるいは折衷主義に対置されて「新興建築」が主張されたとする。しかしそれらも結局は「ブルジョワジーの享乐的・折衷主義的藝術的無節操の原則」のもと、たえず形式的ヴァリエーションとして回収されるという構図を

示している。ゆえに西山は資本主義社会での「ブルジョワジーの真実の様式」を「折衷主義（様式選択主義）」と主張するのである。

この建築史叙述のうえに「日本折衷主義」批判が展開される。日本の建築家は西欧と異なり、藝術の文化的下地を持たぬまま明治維新より「図案家」として教育された。したがって西欧から輸入された諸建築は、様式=図案として直写されているに過ぎないという。すでに山口文象によって提起されていた「素朴な合理主義」批判⁴⁷⁾を補強するかたちで、単なる形態の模倣がブルジョワジーへの無意識的応答にすぎないことを提示したのである。

以上のように西山は支配者階級の建築に対して「折衷主義」批判を展開した。裏返せば、それは様式として主題になりえなかった被支配者階級・庶民の建築の主題化を固く根拠づけたといえよう。

3-3 住宅：「型」による方法論へ

「工業都市」の住居は寝室を基本単位とした単位住戸と共同施設から成る。居室は「睡眠及び個人的休息のためにのみ用いられる」⁴⁸⁾として、炊事場、食堂、洗濯場は共同化されている。ところで一九一七年のロシア革命以後、ソ連において「一部のポリシェヴィキヤアヴァンギャルド建築家たちは、(中略)住空間そのものを作り替えることで、社会主義的な心身をもった『新しい人間』を作り出せると信じていた」⁴⁹⁾。その試みの一つであるコミュン型集合住宅「ドム・コムーナ（露：Дом Коммуна）」は、「プライベートな空間を最小限にとどめる代わりに共有空間を充実させ、家事や育児を公的サービスによって代替する」として私的所有を廃絶し、徹底的な共同化のモメントを持ち込んだものだ。その後の西山によるドム・コムーナの文献翻訳作業などを考慮すると、「工業都市」にドム・コムーナが参照された可能性は高い。

以降、西山は平面計画の探究へ向かう。dezam当初において、すでに平面への傾倒が示唆されており、アレキサンダー・クラインによる「動線」を用いた平面計画に関する分析に批判的検討を加えている⁵⁰⁾。住宅は通り抜けの室をできるだけ持たず、活動と就寝に明確に二分することを提唱するクラインの理論は、西山の平面計画に引き継がれた。

三五年から西山はdezamの同期荒木正巳、和田登とともに大阪の長屋住宅の平面調査に乗り出す。その調査結果を学会誌に提出するも事例抽出の方法が問題とされ掲載を見送られ、これに発奮した西山らは大阪市、京都市、名古屋市を対象に建築届出書類を用いて合計三五九三戸の平面の大量悉皆調査をおこなった。それが一連の論考「都市住宅の建築学的研究（1）-（5）」（1937-1941）である。膨大な調査原票を手集計する作業を通して、庶民住宅に「支配的平面型」がみられることを実証した。

その頃、当局が国民の衣食住を統制しようとするなかで「国民住居」の必要が市井で話題になり、その解答として建築学会が『建築雑誌』上で「居住室のすべてを寝室として転用」しうる平面計画を発表する⁵¹⁾。これを受け西山は調査研究をもとに、庶民の極小住宅には中上流階級の住宅とは異なる質的尺度があるとし、「生活の質的低下防止の

第一線・生活様式再建の基準点⁵²⁾を食室と寝室の分離だと提言した。

これらを土台にして住宅供給の「方法論」（第二章二節）が提出された。食寝分離論は「方法論」における「前提条件」にあたるだろう。

「生活基地」の個々の住宅スケールにも「方法論」が用いられ、世帯別の必要平面数が算出されている。

3-4 空間の構成：社会主義都市の日本への適応

「工業都市」において、個々の住宅にドム・コムーナが重ねられていたように、その全体構成ではソ連の「带状都市」が参照されている。「带状都市」は工場の生産工程に対応して「鉄道、生産・共同サービス、グリーン・ベルト、住居、公園+養育、農業・庭園の六つのゾーンを平行して、いわば金太郎アメ式に同一断面構成をもつものとして、線状に配していくパターン」⁵³⁾で都市を構成するもので、リニアな住居区域の中央を緑地帯が貫く。「工業都市」の配置は、その構成の原型に「带状都市」が据えられていることを示唆する。

他方「生活基地」の構成は、大きく三つのスケールで捉えられている。個々の住宅スケールについてはすでにみた。残り二つは住区スケールと都市（国土）スケールである。住区スケールでは、小学校を中心とする住戸集団を居住者の日常消費生活の範囲と定め、「その内部をそれぞれの共同施設をもつより小規模の集団に分割していく段階構成」⁵⁴⁾をとる。その内部組織で最も重視されるのは「隣組」である。戦時下の統制機構の一部である隣組制度を換骨奪胎し体系に組み込もうとしていることから、住区スケールの構成は日本で培われていた慣行組織をほぼ踏襲しているといえるだろう。

都市スケールでは、上記の「小学校住区」を最小単位とし、その上位集団を「区」とする。このうえに「大都市」が形成され、それら大都市を全国的に配置して新しい「国土」の建設を提示している。「区」は職場と住区含むある職能の一次関連施設をまとめた単能的・自律的な都市とされることから、dezamの「工業都市」は「区」に相当する単位といえる。西山が例示する「区」の模型図は線状の構成を保持しており、「生活基地」の空間構成は、「工業都市」の内部構成を細分化し、スケールを国土にまで拡張したものである。

3-5 観光：「慰安区域」から「大東亜聖地祝祭都市」へ

西山は「大東亜建設記念營造計画」コンペに参加し、「大東亜聖地祝祭都市」⁵⁵⁾（以下「祝祭都市」）を提案している。このコンペについて、戦後の建築界はその参加を戦争協力の踏み絵とみなす傾向にあり⁵⁶⁾、対して井上章一はむしろ戦争からの逃避として位置づけた⁵⁷⁾が、「転向」と同じく解釈の問題に収斂してしまわないことが必要だろう。以下では、提案にみられる形態のナショナリズム性を指摘しつつ、

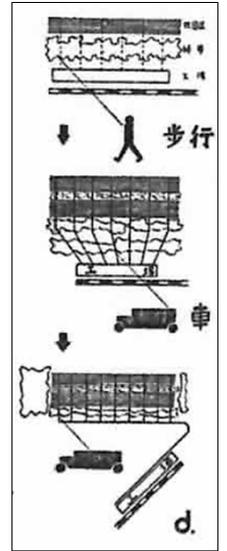


図1 「工業都市」の地域計画ダイアグラム
（久西山文庫編『西山知三とその時代』西山文庫、2000、p13より図版引用）

表2 「生活基地」と「工業都市」 （筆者作成）

	根拠	建設主体	社会	空間の構成									
				1 住宅 <small>(人間→家具→空間)</small>	2 隣組 10-12戸	3 組連合 数組	4 町 隣組×10	5 住区 町×10 5,000-10,000人	6 区,小都市 住区×10 50,000-100,000人	8 市 区×5	9 大都市 区及び市の連合	10 国土	
dezamにおける「工業都市」	唯物史観	国家	-	1 住宅 <small>(人間→家具→空間)</small>	-	2 工業都市 40,000人	-	-	-	-	-	-	-
『新建築』における「生活基地」	唯物史観	国家	計画経済	1 住宅 <small>(「型」による計画)</small>	2 隣組 10-12戸	3 組連合 数組	4 町 隣組×10	5 住区 町×10 5,000-10,000人	6 区,小都市 住区×10 50,000-100,000人	8 市 区×5	9 大都市 区及び市の連合	10 国土	-

提案が「生活基地」構想の一部であったことを示す。

「小史」のなかで、「折衷主義」がブルジョワジーの様式とされたことはすでに指摘した。くわえて古代様式の復興ならびに国民的建築の要望は帝国主義下における「折衷主義」の一形態とみなされている。一九三七年に発表した「『日本工作文化聯盟』批判」⁵⁸⁾のなかでは、「『日本的なもの』とは一の迷子であって、どうにでも解釈し得るが、同時にそれはその人の主観的信念の範囲内でのみ通用するものにすぎないものである」と問題化されているのだが、「祝祭都市」において、西山は「日本的なもの」をかたちづくる建築家としてあらわれる。その形態は、古代の参照や国民意識を高揚させるような装飾として、明らかに帝国主義的のものを描いている。形態は、西山の出発点としたマルクス主義から大きな隔たりをもち、かつ自らが否定したはずの極端なナショナリズムに接続してしまったことになる。西山にとって建設の主体は国家であれど、その対象はあくまで大衆だったはずだ。マルクス主義に依る理論から形態を立ち上げようとする西山の内面においてこそ「逆転して国家へ」と向かうベクトルは見出せる。

他方で「祝祭都市」は、「工業都市」において労働力の再生産場所としてスポーツスタジアムなどと構想された「慰安区域」の延長とみなすことができる。「祝祭都市」は「錬成を行えるような施設と、誰もが漫遊する行楽、文化、教養の施設と——それを絶えず高めて行く原動力となる機関とを、併せ持った聖地」である国民の観光地として設定されている。「日々の生活は、職場と住所の輪廻に限られるが、居住者の国民としての生活はそれに終始することなく、彼をより広いものに結びつける構成を必要とする」というとき、「労働」と「休養」にくわえて「レクリエーション」が捉えられようとしている。というのも六〇代に西山は、「レクリエーション」を「労働とともに人間生活を豊かにし、社会の想像的發展をおしすすめる人間の能力をつかかってきた、生活の重要な一部分」⁵⁹⁾と定義し、利潤目的の観光開発に対して観光計画論を唱えた。「祝祭都市」は以後の観光計画論の萌芽としても位置づけられるだろう。

結章

本研究は以下のことを明らかにした。

- (1) 布野と広原の議論は「転向」という議論の平面にとどまり、革命運動への実践に直結したマルクス主義者としての西山像とともに理想化していた。
- (2) 西山はソ連の建築を模範に国家社会主義下の建築思潮としてマルクス主義と接触した。その後自身が打ち立てた建築生産体系を統括する建築家像を実現させるために営団に就職しており、要するに西山において、庶民住宅の問題は国家の政策が担うべきとする姿勢が疑われたことはない。戦時下において西山は国家社会主義的枠組みを疑うことなく保持したのである。
- (3) 終戦直後に示した「生活基地」の構想の地平は、すでにdezamで描いた「工業都市」において用意されていた。

この意味で西山は戦時下をよどみなく駆け抜けた国家社会主義的建築家であった。今後、西山の国家社会主義的性格の位置づけをより明確にする意味でも、戦時下における西山以外の建築家たち、階級闘争に文字通り参加した今泉善一や『資本論』を聖書としながら独自の折衷主義を形成した村野藤吾など、のマルクス受容とその後の展開について比較する必要があるだろう。とくに「MICHELANGELO頌——Le Corbusier論への序説として」で鮮烈な建築論デビューを果たした丹下

健三との構図は再検討する必要がある。また西山の戦後について、本研究ではその零地点に触れるにとどまっている。五十年代の伝統・民衆論争などへの軌跡も含め、今後の展望としたい。

- 注釈
- 注1) 本多昭一著、松井昭光監修『日本近代建築運動史』ドメス出版、2003.05.01。
- 注2) 西山卯三『住み方の記』文藝春秋、1965。西山卯三『あゝ楼台の花に酔う』筑摩書房、1982。西山卯三『建築学入門—生活学の探求(上)』勁草書房、1983。西山卯三『戦争と住宅—生活学の探求(下)』勁草書房、1983。西山卯三『大正の中学生』彰国社、1992。西山卯三『安治川物語』日本経済評論社、1997。
- 注3) 『住宅計画 西山卯三著作集1』勁草書房、1967.08.10。『住居論 西山卯三著作集2』勁草書房、1968.01.25。『地域空間論 西山卯三著作集3』勁草書房、1968.12.10。『建築論 西山卯三著作集4』勁草書房、1969.04.05。
- 注4) 西山卯三『国民住居論』伊藤書店、1944.06.11。
- 注5) NPO 法人西山卯三記念すまい、まちづくり文庫『西山文庫とは』(http://www.n-bunko.org/about.html 閲覧日:2024.02.05)。
- 注6) この成果は NPO 法人西山卯三記念すまい、まちづくり文庫編『西山卯三とその時代』NPO 法人西山卯三記念すまい、まちづくり文庫、2000。にまとめられている。
- 注7) 住田昌二、NPO 法人西山卯三記念すまい、まちづくり文庫編『西山卯三の住宅・都市論—その現代的検証』日本経済評論社、2007。
- 注8) 布野修司『西山卯三論序説』建築文化、1994.10-12。
- 注9) 広原盛明『評伝・西山卯三』京都大学学術出版社、2023.09.07。
- 注10) 布野修司『戦後建築論—アートの相模書房、1981.06.15。以下、本研究では増補改訂版である布野修司『戦後建築の終焉 世紀末建築論—アートの相模書房』1995.08.31を引用に用いる。
- 注11) 同時代建築研究会編『悲喜劇—一九三〇年代の建築と文化』現代企画室、1981.12.05.p357。
- 注12) 宮内康『建築運動史から見た建築における昭和』建築文化、1975.11。
- 注13) 鶴見俊輔『転向の共同研究について』、思想の科学研究会編『共同研究転向 上巻』平凡社、1959.01.10.p5。
- 注14) 注10.p113。
- 注15) 西山卯三『住宅問題』相模書房、1942.12.25。
- 注16) 注10.p121。
- 注17) 注15.p18。
- 注18) 注15.p147。
- 注19) 注10.p113。
- 注20) 西山卯三『様式の『黙殺』より『埋葬』へ』dezam4、1931.06。
- 注21) dezam『建築と建築生産』dezam7、1932.12。
- 注22) 自伝には「社会オンチ」と題された節がある(『建築学入門』p99-p102)。
- 注23) 伏原五郎『建築に就いての走り書きの考察』dezam4、1931.06。
- 注24) 西山卯三『建築学入門—生活学の探求(上)』勁草書房、1983.03.30.p62。
- 注25) 久保誠二郎『マルクス主義普及史研究における『日本マルクス主義文庫』の位置』マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究月第3号、2002.10。および久保誠二郎『マルクス主義関連文庫』(http://www.riic.hi-ho.ne.jp/jlme/index.html 閲覧日:2024.01.22)。
- 注26) 注24.p62。
- 注27) 香川三郎『建築家』のための建築小史【1】-【5】』国際建築、1933.09-1934.02。
- 注28) 自伝によれば、「СТРИТЕЛЬСТВО МОСКВЫ (『モスクワの建設』)、АРХИТЕКТУРА СССР (『ソヴィエト連邦の建築』)、АКАДЕМИЯ АРХИТЕКТУРА (『建築アカデミー』)を読んでいたという(西山卯三『建築学入門』p130-p131)。
- 注29) 注9.p120。
- 注30) 鶴見による偽装転向とは、「権力者側にたいしては、強制力ともなって権力者の意図に近づけようとする思想変化をしたように見え、権力者以外の諸勢力にたいしては、権力者の意図と対立するこれまでの思想の意図が、新しい状況にふさわしい表現形態と戦略戦術を得て(中略)実現されるものと見えるような)転向を指す(鶴見俊輔『翼賛運動の設計者—近衛文麿』、思想の科学研究会編『共同研究転向 中巻』平凡社、1960.02.20.p53)。
- 注31) 大河内一男『社会科学と知識層』勁草書房、1948.09.30.p241。『評伝』p118でも引用されている。
- 注32) 注9.p117。
- 注33) 鶴見俊輔『転向の共同研究について』p2-p3。
- 注34) 注3。『住宅計画』p40。『住宅政策への一展望—建築行政の新展開と建築の任務』の解説。
- 注35) 原題は、西山卯三『庶民住宅の建築学的課題』建築雑誌、1941.1。
- 注36) 注4.p114。
- 注37) 西山卯三『住宅政策への一展望—建築行政の新展開と建築の任務』都市公論、1939.11。
- 注38) 香川三郎『建築美学』国際建築、1934.03。
- 注39) 西山卯三『住居建築家覚書』新建築、1942.1。
- 注40) 西山卯三『既存住宅施設の動員に関する諸問題』不動産時報、1943.08。
- 注41) 同上。
- 注42) 住田昌二、西山卯三『西山卯三の住宅・都市論—その現代的検証』p72。
- 注43) dezam『創意と現実—六大学学生建築展覧会における京大学生の提案について』dezam、1931.1。
- 注44) 注24.p156。
- 注45) 注3『地域空間論』p207。
- 注46) 西山卯三『様式の『黙殺』より『埋葬』へ』dezam4、1931.06。
- 注47) 「素朴的な合理主義」とは、自然科学的方面、工学的方面をあたかも綿密に実践しているかのようにみえるものの、(マルクス主義のいうところの労働者のための)社会科学的側面を欠いている片手落ちの合理主義をいう。プロレタリアートの解放運動に参加することこそが建築家の実践の道であるとした(岡村蚊象『新建築に於ける唯物主義』アトリエ、1930。岡村蚊象、合理主義反省の要望、国際建築、11月号、1929.11。岡村蚊象『新興建築家の実践とは—統一合理主義反省の要望』建築文化、1978.08)。
- 注48) 注43。
- 注49) 本田見子『革命と住宅』株式会社ゲンロン、2023.09.25.p46。
- 注50) 西山卯三『建築形制の系統化—の一考察—アレクサンダー—クラインの平面計画の延長とその批判』dezam5、1932.02。
- 注51) 住宅問題委員会『庶民住宅の技術的研究』建築雑誌、1941.02。
- 注52) 西山卯三『住宅の基本空間に対する考察』建築と社会、1941.04。
- 注53) 八東はじめ『ロシア・アヴァンギャルド建築』増補版』LIXIL 出版、2015.03.20.p315。
- 注54) 注3。『住宅計画』p517。
- 注55) 西山の提案は落選するが、自ら編輯社に持ち込み、一九四三年一月の新建築誌上に五ページにわたって「大東亜聖地祝祭都市計画案覚書」として掲載された。住宅営団の仕事と並行して「かなりのエネルギーを注ぎ込んでまとめた」という(西山卯三『戦争と住宅—生活空間の探究(下)』勁草書房、1983.07.15.p736)。
- 注56) たとえば宮内嘉久は、冊子に対して「『コンペ』に応募するという積極的な形で、ファシズムの悪化に対する諷刺を奏でた」と評する(宮内嘉久『少数派建築論—編集者の証言』井上書院、1974.05.15.p173-p174)。
- 注57) この企画は、後世から戦争協力の例として位置づけられる。そして、確かに、この企画に並行して「大東亜聖地祝祭都市計画案覚書」は、大東亜戦争を賛美した。しかし彼らは、ただ賛美しただけである。戦争遂行に関する具体的な協力は、何もしていない、いや、むしろ非協力的かつとさりとて、戦時下の建設活動に背を向けて、空想図面を夢に見る。この姿勢は、ありていって、戦争から逃避しているものなのではないか(井上書院『戦時下日本の建築家—アート・キッシュ・ジャパネスク』朝日新聞社、1995.07.25.p189)。
- 注58) 河丸莊助『日本工作文化聯盟』批判』国際建築、1937.05。
- 注59) 西山卯三『レクリエーションのための国土計画』国際建築、1960.02。